

街歩き

街並み生い立ち 港町横浜と佐世保 〈横浜編〉

「街並み生い立ち 街歩き」 執筆テーマ

- ① 街並みの生い立ちを歩く
〈横浜編〉
 - ② 大通り公園
 - ③ 都心プロムナード
 - ④ くすのき広場と横浜市庁舎
 - ⑤ 横浜公園と日本大通り
 - ⑥ 日本大通りの建物たち
 - ⑦ 開港広場
 - ⑧ 山下公園通り
 - ⑨ 横浜人形の家
 - ⑩ 元町、中華街、馬車道、伊勢佐木町
 - ⑪ 港の見える丘公園周辺
 - ⑫ 外人墓地、元町公園周辺
 - ⑬ 山手公園、イタリア山庭園周辺
 - ⑭ 歴史を生かしたまちづくり
〈佐世保編〉
 - ⑮ 佐世保の街づくり
 - ⑯ コンパクトシティ佐世保
 - ⑰ 三ヶ町四ヶ町商店街
 - ⑲ 心やさしい海辺のまち
- (テーマは予定です。変更となる場合もあります)

11. 「港の見える丘公園」周辺

緑と洋館とが一体となった 豊かな空間

今回から3回にわたって「関内地区」に隣接する「山手地区」を歩きます。

「山手地区」は海拔10~40m程の丘陵地で、開港当初から明治・大正時代にかけて、外国人用居留地として「関内地区」と共に発展した街です(コラム参照)。関東大震災によって西洋館などの建物は壊滅しましたが、道路などの骨格は変わっておらず、尾根道や坂道、古い石垣などによって当時の姿を忍ぶことが出来、近代横浜の発祥の地の面影を残す貴重な場所です(写真1)。

都市空間としての特徴は、小高い起伏に富んだ丘陵地にゆとりをもつた住宅地が展開していることです。公園や斜面のオープンスペースと豊かな緑が、余裕のある建築敷地などと一体になって、都心部に隣接した地区にもかかわらず、変化のある豊かな空間が形成されています。そして、あちこちに点在する西洋館やミッションスクール、教会などの建物によって、エキゾチックで文化的な雰囲気をもつ独特な景観が拡がっています。また港と街を見下ろすことのできる眺望の地であるために、市内外から非常に多くの人々が訪れるヨコハマのシンボルゾーンといえます(写真2, 3)



写真2 港の見える丘公園から大桟橋方面を見る



写真3 港の見える丘公園からベイブリッジ方面を見る

なかでも尾根道である「山手本通り」を中心とする景観は、最も特徴的といえます。山手地区に残されている西洋館のうち特に優れた佇まいをみせていく建物がこの通りに沿って立地しており、また公園、墓地、教会、学校などの公共公益施設が立地して空間の節目を形成し、全体としてリズム感のある景観に質の高さが感じられます。特に「港の見える丘公園」から「外人墓地」「元町公園」「代官坂」へと続く通りの景観は、空間の開放感と閉鎖感、印象的なアイストップ、緑と建物の組み合わせなどによって優れた都市景観を形成しています(写真4, 5)。

現在も、震災後に建てられた西洋館をはじめ、「フェリス」「雙葉」などの学校、「山手公園」「元町公園」「港の見える丘公園」などの公園、「山手資料館」「大佛次郎記念館」「神奈川近代文学館」などの資料館、「イギリス館」などの集会施設など、多くの教育、文化、レクリエーション施設が集積する親しみやすい場所となっています。



写真1 外人墓地と元町公園の間にある貝殻坂



写真4 外人墓地付近の山手本通り



写真5 元町公園付近の山手本通り

閑内から山手へ

「閑内地区」から「山手地区」に行くには、「横浜人形の家」から「フランス橋」を渡り、「フランス山」から「港の見える丘公園」の中を通るか「谷戸坂」を上るルートがあります。

また「元町商店街」のメインストリートに直行する道から、坂道や階段のある道を上るルートがあります。

最寄りの鉄道駅は、一つはみなとみらい線「元町・中華街駅」で、元町口から「谷戸坂」を上るか「フランス山」に入るルートと、駅舎ビルの最上階にあるアメリカ山公園口から山の上の「アメリカ山公園」に直接入るルートがあります。

もう一つはJR根岸線「石川町駅」南口から「大丸谷坂」か「地蔵坂」を上るルートがあります。

それでは「フランス山」から「山手本通り」を通り、「石川町駅」までの街歩きをしたいと思います。今回は「港の見える丘公園」周辺です。

谷戸坂

「谷戸坂」は、開港以前より「本牧十二天」に至る信仰の道だったようです。「フランス橋」のスロープからそのまま「谷戸坂」につながります（写真6）。坂の途中から左側の脇道に入ると階段のある裏坂があり「フランス山」に沿ってブラフ積の石垣が見られます（写真7）。

坂の上は「港の見える丘公園」の入り口があり、「山手本通り」と「ワシン坂」に分かれる交差点になっています。



写真6 谷戸坂。標識の左側はフランス橋のスロープ



写真7 ブラフ積みと説明板 (ブラフ99ガーデン脇)

港の見える丘公園

この公園一帯は、開港当時は外国人居留地でした。太平洋戦争後の接收が解除されてから、横浜市が順次土地を取得し、1962(昭和37)年に開園して以来、様々な施設を整備して今日の姿になっています。

大きく次の五つの地区で構成されます。

[フランス山地区]

「フランス山」は「港の見える丘公園」の一部ですが、幕末から明治初期にかけて、外国人殺傷事件に備え自国民を保護するという名目でフランス軍が駐屯したことからこの名がついています。同様にイギリス軍も、現在「横浜市イギリス館」がある地域一帯に駐屯したので「イギリス山」と呼んでいます。

1875(明治8)年に両軍が撤退した後、1896(明治29)年にレンガ造2階建てのフランス領事館と領事官邸が「フランス山」に建設されましたが、関東大震災で倒壊しています。震災後の1930(昭和5)年に再建されましたが1947(昭和22)年に焼失しました。

1971(昭和46)年、横浜市がこの地をフランス政府から購入、公園として整備し、1972(昭和47)年に「港の見える丘公園」の一部として開園しました。1980(昭和55)年には平地部分に、解体されたパリの「ラール中央市場」の鉄骨がモニュメントとして設置されています。

そして1984(昭和59)年、フランス橋がゲートとして設置されることによって、街に開かれた公園にリニューアルされました（写真8）。



写真8 完成直後のフランス橋。公園内にラール中央市場の鉄骨モニュメント、右手に木造の神奈川日冷製氷工場。

しかし鬱蒼とした森の斜面部分は、2002(平成14)年度から2カ年にわたって整備され、幕末から昭和初期の歴史を知ることが出来る庭園

となり、山の上の「展望広場地区」へ行くのに分かり易くなりました(写真9,10)。



写真9 フランス山の平地部。正面にレアルのモニュメント、右手の階段で斜面部へ。



写真10 フランス山斜面部のフランス領事館公邸遺構

[展望広場地区]

展望台のあるこの地区は、1962(昭和37)年に「港の見える公園」と名付けて最初に開園されたところです(写真11)。



写真11 港の見える丘公園の展望広場

明治初期にイギリス軍が駐屯した地域で、太平洋戦争後は進駐軍により接收され、解除に伴い横浜市が公園用地として取得して整備しました。

標高は約30Mで、港の水面を高い場所から見下ろすという風景ではありませんが、ベイブリッジや港湾施設、マリンタワーなどを見渡せ、美しい夜景も見ることが出来ます(写真2,3,12)。



写真12 展望台からのベイブリッジ方面

渡せ、美しい夜景も見ることが出来ます(写真2,3,12)。

[イギリス山地区]

大佛次郎記念館

サンクンガーデンの正面に、横浜ゆかりの文人大佛次郎の記念館があります。レンガ貼りの左右対称のデザインで、1978(昭和53)年に浦辺建築設計事務所の設計で建設されました(写真13)。



写真13 サンクンガーデンと大仏次郎記念館

バラ園

展望広場に向かう右手に1991(平成3)年に「市の花」制定記念としてバラ園がオープン、約110種1300株ほどのバラが植えられています。

コラム

山手地区の歴史(その1)

山手地区は、関内居留地とは開削された堀割川をはさんで隣接し、高燥で眺望に恵まれた地であったために、外国人達から住宅地として開放することが望まれていた場所でした。

そして1861年(文久元)年に米国、次いで英仏両国が、神奈川の領事館移転候補地として山手の借入許可を獲得し山手の居留地化が始まりました。英国は、東京の仮公使館東禅寺襲撃に対

応して山手に軍事拠点を獲得し、軍事基地化を強めました。

一方で、居留外国人による山手開放の要求も強くなり、1867年(慶應3)年には山手地所競売に至っています。山手開放後の1868年(明治元)年には、街路や地所区画がなされ、1875年(明治8)年の英仏両軍の撤退に伴い、跡地は領事館や宅地に分割されました。また新道の開削、居留地の拡張がなされ、下水道や石

積擁壁の築造が施工されていました。1860年(文久元)年から1878年(明治11)年にかけて、「外国人墓地」の区画が確定され、また1871年(明治4)年に外国人のための公園として「山手公園」が開園しています。ここは近代テニスの発祥の地でもあり、英國軍楽隊のバンド演奏やフラワーショウなどが盛んに行われ、居留地社会の社交場となりました。

1877(明治10)年には山手の270区画が確定しています。一方、英國、米国、ドイツの各海軍病院や一般病院など、病院も

イギリス館(旧英國総領事公邸)

そしてその奥に「イギリス館」があります。1937(昭和12)年に上海の大英工部総署の設計によって建てられた英國総領事の公邸です。1969(昭和44)年に横浜市が取得し翌年に開館、1階ホールはコンサートに、2階集会室は会議等に利用されています。2002(平成14)年からは2階の一部が一般公開されています(写真14)。



写真14 バラ園とイギリス館

山手111番館(旧ラフィン邸)

「イギリス館」の隣の噴水広場をはさんで「山手111番館」があります。1926(大正15)年、J.H.モーガンの設計によって建てられ、広い芝生の前庭と玄関前に3連のアーチを配

したパーゴラがある外観と、内部の中央に吹抜けのある広い居間を持つスペニッシュスタイルの洋館です。1996(平成8)年に横浜市は敷地を取得し、建物の寄贈を受けて保存改修を行い1999(平成11)年から公開されています(写真15)。



写真15 山手111番館

[近代文学館地区]

「大佛次郎記念館」の脇の「霧笛橋」を渡ると「県立近代文学館」があります。両施設とも浦辺建築設計事務所の設計で、「文学館」は1984(昭和59)年に、「霧笛橋」は1986(昭和61)年に建設されました。

[プラフ99ガーデン]

「横浜外国人墓地」正門の前に、

順次完備されていきました。また、居留外国人子弟の教育とキリスト教布教を目的として、多くの学校が設立されました。1871年(明治4)年の「横浜共立学園」、1874年(明治7)年の「フェリス女学院」、1899(明治32)年の「横浜雙葉学園(前身はサンモール女学校)」、1901(明治34)年の「セント・ジョセフ・カレッジ」、1906(明治39)年の「市立第四高等小学校」などをはじめ、「インターナショナル・スクール」「横浜女子商業学園」が、また現存しませんが「ブラウン塾」「美会神学

校(青山学院の前身)」「ブリテン女学校(成美学園の前身)」などがありました。

明治中期以降は煉瓦造による本格的な西洋館が建ちはじめ、ガスや上水道も敷かれました。また、閑内居留地にあった「カトリック教会」が1906(明治39)年に、「クリスチ・チャーチ」が1901(明治34)年に、「ゲーテ座(パブリック・ホール)」が1885(明治18)年に、それぞれ山手へ移転してくるなど山手文化の華がひらいています。



写真16 ブラフ99ガーデン。右手が展望広場方面、左手がアメリカ山方面、正面の建物が横浜地方気象台

2014(平成26)年にオープンしたばかりの街角の小公園です。以前は埠に囲まれていた「横浜税関山手パーク」の跡地を横浜市が取得し、離れていますが「港の見える丘公園」の一部として街に開放したものです(写真16)。

次回は「外人墓地」から「元町公園」周辺を歩きます。

〈参考文献〉

1. 「港町・横浜の都市形成史」
(編集発行: 横浜市企画調整局)
2. 「都市の記憶—横浜の近代建築(II)」
(企画: 横浜市都市計画局都市デザイン室
発行: 横浜市歴史的資産調査会)
3. 「SD 都市デザイナー横浜 その発想と展開」
(編集: SD編集部 発行: 鹿島出版会)

にしづき・としお

早稲田大学・同大学院建築学科で学んだ後、大高建築設計事務所、武建築計画研究所で多摩NT計画、港北NT計画、再開発計画、観光開発計画、建築設計などに携わった。

36歳の時(1976年)、横浜市役所にアーバンデザイン担当主査として招聘される。都市デザイン室長、都市企画部長、都心部整備部長などを歴任し、「閑内地区」「山手地区」「横浜駅周辺地区」「みなとみらい21地区」「金沢シーサイドタウン地区」「港北ニュータウン地区」「市民まちづくり」「歴史を生かしたまちづくり」「水と緑のまちづくり」「ライタップなど都市空間演出」「デザイン都市横浜に向けた活動」等々、22年間に亘り横浜市の街づくりに携わり、都市デザインの具体的な実践活動を展開した。

59歳の時(1999年)、佐世保市役所に佐世保市理事(都市デザイン担当)として招聘され、7年間、海と緑に抱かれた心優しい街の都市デザインに取り組む。

首都圏と地方との二つの自治体、コンサルタント、事業者など、異なる立場から都市や建築に関わり、都市デザインを実践してきた。様々な公的委員や大学非常勤講師を歴任。講演、論文、著書、活動成果に対する受賞などがある。